

虹に

身近にあった天職

①99 時計修理の職人



店で時計を修理する麻地さん

昭和を感じさせる振り子時計が壁一面に並ぶ。黒部市立あおーよ図書館近くの商店街にある「あさじ時計店」。AMラジオが流れる店の奥で、3代目の麻地^{ひろゆき}幸さん(45)が腕時計の修理を進めていた。

祖父の代から使われている木製の机の前に座り、強いライトで手元の腕時計を照らす。右目に筒状のルーペを付け、ピンセットで慎重に歯車を取り付ける。

時計の修理には、細かい作業が求められる。ぜんまいで動く機械式腕時計の部品は多い物で200個を超え、髪の毛より細い部分もある。

店に修理の依頼で持ち込まれるのは、形見の腕時計だったり、家で長年使われていた柱時計だったり。時計は単なる道具ではなく、持ち主の思い出が強い。修理にプレッシャーはかかるが、客に喜んでもらうのが、何よりのやりがいだ。

麻地さんがこの仕事を始めて20年近く。悩むことは多いが、やめたいと思ったことはない。かつては避けていた家業が、今は天職だと思える。

◇

あさじ時計店は1947(昭和22)年、祖父の故幸^{こうさく}作さんが創業した。「修理ができるから、販売もできる」が幸作さんのモットー。当時、時計は修理して使い続けるのが一般的だった。

70年代に入ると、クォーツ時計が市場を席巻。量産化が進み、安価な商品が出回るようになる。販売価格よりも修理代の方が高くなり、時計が使い捨てのようになっていく。あさじ時計店に修理を頼みに来る人は減っていった。

だが、90年代になると、機械式腕時計は工芸品的な価値が見直され、人気を取り戻す。あさじ時計店は商品の販売は減ったものの、修理がメイン。スマートフォンなどが普及した現在でも、機械式腕時計の修理の依頼は絶えない。麻地さんの父で、2代目の幸^{ゆきのぶ}伸さん(76)は「うちが生き残れたのは、修理技術があったから」と振り返る。

◇

麻地さんは2人兄弟の長男。小学校の帰りには店に寄り、祖父や父が働く姿を目にしていた。だが、家業を継ぐ気はなかった。「普通のサラリーマンの方がかっこよく見え、自営業は泥臭く感じた」。商店街の人通りが減る中で、子ども心にも店の将来は

明るく感じられなかった。

幸伸さんも店を継ぐように言ったことはない。「自分は跡継ぎになるしか道はなかったが、子どもには好きなことをやらせたかった」。ただ、小さな頃から精巧な模型を器用に作る長男を見て、時計修理に向いているとは思っていた。

麻地さんは魚津工業高校を卒業し、金沢市内の大学に進学。だが、「生涯打ち込める仕事にはつながっていない」と感じ、1年足らずで退学した。その後、遺跡発掘のアルバイトをした際、歴史にロマンを感じ、通信制の大学の史学部に入る。地元の建材や自動車部品のメーカーで派遣社員として働き、学費を稼ぎながら勉強した。

卒業後は県内の製薬メーカーに正社員として就職し、工場で働いた。将来性があると思って入った会社だったが、客と直接関

店が終わった後も、夜遅くまで作業に没頭したが、全く苦にならなかった。

部品の取り扱いの難しさに音を上げそうになる時期もあった。そんな時は父や祖父の姿を思い出した。「どんなに上手な職人でも失敗し、乗り越えてきたはず。だから、諦めるわけにはいかない」。気持ちを奮い立たせた。

父からよく言われたのが、「中途半端にするな」。不安を持ったままの状態に客に渡しても、後に不具合が出てしまう。その一方で、「やり過ぎるな」と矛盾するようなアドバイスも受けた。

完璧な修理を目指し、誤差を少しでも縮めようと、最後に手を加えると、逆に誤差が大きくなったり、部品が壊れたりすることがある。だんだん父の言葉の意味が分かるようになっていった。



「秋の実ひとつ」 西治子

わる仕事がしたいと考えるようになった。3カ月で退職した。

自分に向いた仕事はなかなか見つからない。とりあえず、父が営む店を手伝うことにした。

◇

店の仕事をするようになり、気持ちが変化。父の修理した時計を受け取り、喜ぶお客さんの姿を見て、「自分が探していた仕事はこれかもしれない」と思った。「灯台下暗しでした。ずっと家業に目を背け、気付けずにいた」

仕事の合間に、機械式腕時計の修理の練習を始めた。在庫のジャンク品の時計を片っ端から分解し、組み立てる作業を繰り返した。何個も時計を壊しながら腕を磨いた。

毎日、気付いたことをノートに付け、時計の展開図や父からの助言を書き込んだ。

働き始めて3年ほどたった頃、店に年配の女性が修理の依頼に訪れた。手にしていたのは、オメガの手巻き式の腕時計。女性用のサイズの小さな物だった。

話を聞くと、形見の品らしい。他の店に修理を断られ、「ここでだめだったら諦めます」と言われた。女性用の腕時計は部品が小さく、修理が難しいため、敬遠されたのかもしれない。麻地さんはそれまで海外製の機械式腕時計を1人で修理したことはなかったが、ステップアップしようと、引き受けることにした。

ふたを開けると、長い間使っていなかったせいか、汚れがあり、油も切れていた。小さな部品を分解していくと、幸い、どの部品も傷んではいなかった。洗浄し、慎重に組み立て直した。

ぜんまいを巻いて動かすと、全ての歯車

がかみ合い、時を刻み始めた。美しい、と思った。小さな宇宙が動いているような、壮大で神秘的なもののように感じた。修理を終えて時計を返すと、女性は涙を流して喜んでくれた。

その後、麻地さんは国家資格の1級時計修理技能士検定に合格。ロレックスやオメガといった海外製の高級腕時計の修理も本格的に手掛けるようになった。幸伸さんは「昔の職人なら15年から20年かかることを、5年くらいでマスターした」と言う。

◇

麻地さんの一日の仕事は、ルーティンから始まる。店に着くと、まず両手を広げ、手のひらを下に向け、指を握って開く動きを30回繰り返す。次は手のひらを上に向けて30回。父から教わった、指の筋を鍛える体操だ。

目が疲れていない午前には部品の細かい腕時計を2本、午後は掛け時計を3個ほどのペースで修理していく。大きな柱時計などは幸伸さんと共に作業に当たる。

持ち込まれた時計で、修理できるのは9割程度。直るかどうかは、文字通り、ふたを開けてみないと分からない。もともと修理は故障から始まっているため、トラブルはつきもの。古すぎて部品がない時計もあれば、直した後に不具合が起きるケースもある。

時計は客の思い出が強い分、厳しいクレームを受けるときがある。客の落胆する顔を見るのが、たまらなくつらい。修理の仕事は、技術だけではなく、客に納得してもらえる説明も重要だと感じるようになった。「一生懸命お客さんに向き合えば、分かってもらえる」

経験を積み、より慎重に作業するようになったという。ミスを技術的に挽回できることは増えたが、やり直したいことは多々ある。「もしタイムマシンがあれば、使い倒します」と言う。今も、修理の工程を変えてみたり、時計を傷つけないように布の素材を変えたり、細かな工夫を試みる。修理した時計がより長く使えるように、職人としての時を重ねる。

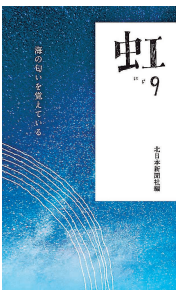
麻地さんは2010年からブログを始め、時計修理のことを紹介しています。毎日欠かさず書き続けて15年余り。投稿は5700件を超えます。日々の積み重ねができる才能は、職人としての適性に通じているような気がします。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は12月1日(月)です。